世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業・業務完了報告書

１．　業務の概要：	
（１）事業名	ネパール・サクー村の訓練センターの拡充と人材育成
（２）実施団体名	特定非営利活動法人　国際交流の会とよなか（TIFA）
（３）実施期間	2017 年 5 月 1 日から 2018 年 2 月 28 日まで
（４）実施国	ネパール連邦民主共和国
（５）活動地域	サクー村と周辺の村、カトマンズ、日本（大阪・豊中市近辺都市）

（６）活動概要

①活動の背景：

サクー村の農村女性支援活動は、①農村女性の自立支援、②子どもの教育支援の 2 本立てで動いてきた。女性の自立支援活動は子どもの教育支援活動、給食支援活動へと繋がり、当地のコーディネイターとの連携で活動している。　寄付金、助成金、里親制度の導入から、②の活動はなんとか成り立っている。一方、①の活動は、作業所で働く女性たちが日常に作り出す製品、すなわち、ミシン作業によるブラウス、バッグ、パンツ、ダカ織機によるダカ織ショール、小物製品などの売上金、及び、寄付金により運営されている。日本での販売活動は、地域のイベントでの展示、販売や、店への委託などに限られている。販路を広げ、製品がコンスタントに売れていくためには、まずは、彼らの技術を高め、良い作品を作ることが求められる。特に、現地では、伝統的織物であるダカ織への関心が強く、織り手の技術もついてきた今、市場に出していけるものへと完成していきたい。農村女性が、自ら製作し、販売し、そこから賃金を得る営みは、かれらの日常である家事、畑仕事にとどまらず､かれらの活動の場を広げ､より多くの貧しい女性たちの関心を呼び起こし、村（コミュニティー）の活性化に繋がることを目指す。

②活動の目標：

サクー村の農村女性の自立支援活動は、7 年目に入る。しかし、2015 年に起きた大地震により、村は、家屋の殆どが、崩壊し、村人は、仮設小屋での生活を続けている（政府からの支援金はいまだに発生していない)。作業所となる建物は、健在であったが、村人のシェルターとして使われ、2 部屋の借り部屋は、1 室に削減された。地震後の地域状況から、適当な作業場は、見つからず、1 室でがんばっている。今年度（2017 年度）は、作業場を広くし、効果的に作業できる環境をつくり、作業所（センター）の活動を活性化させたい。又、作業者の技能を高め、より質の高い製品づくりを目指したい。そのために、人材育成の具体的取組を進めていきたい。さらに、村のより多くの関心ある女性へ、活動の範囲を広めていきたい。

２．　業務実施結果：
（１）実施した内容 【実施内容①】4 月 17 日～24 日ネパール訪問。本計画について、当地と話し合い。新しい作業部屋の候補を見学。 【実施内容②】5 月～6 月　現地スタッフによる機材や備品の購入。新しい作業部屋への移動（ダカ織、作業中のため従来の場所を借りる）をし、ミシンとダカ機一部を移動。 【実施内容④】訓練生の選出をし、上級クラスへ２人の経験者を送る。一方、ミシンとダカ織の教室を開き、４ヶ月の体験と訓練コースを無料で村の女性へ提供する。１２名のミシン生とダカ織訓練生４名が選出される。（実施内容③については、計画より外した。） 【実施内容⑤】2 名の指導者を、カトマンズより迎える。上級クラス 2 名は、プライベートの教室（Srijana Boutique & training center）へ通学する。（３ヶ月） 講師によるミシン縫製教室は、５月～７月の３ヶ月、ダカ織は７月の１ヶ月教室で、いずれも週 6 日実施。ミシンへは、１２名、ダカ織は、４名の希望者対象。　ミシン縫製については、講師の指導後１ヶ月は、生徒たちで実習する。 【実施内容⑥】9 月 11 日～26 日ネパール訪問。作業現場を見学し、購入品の点検を行う。かれらの製品を見、コメントを出し合う。１５日、訓練生との交流と修了証を授与する。 ２２日　ネパール JICA 事務所に、現地 NGO 代表と共に訪問し、サクー訓練所の活動説明をし、作品へのアドバイスを受ける。また、JICA 事務所内の展示コーナーへアピール文と共に、ダカ織を展示してもらう。 【実施内容⑦】11 月末より当地代表による領収書整理と日本への送付依頼。　報告書作成準備に入る。　２月３，４日の関西におけるワンワールドフェスティバルに参加し、本事業の報告を TIFA ブースにて、行う。（活動内容を掲示し、他の参加グループ（NPO 及び NGO）の活動と交流する。） 【その他①】ネパール訪問時は、教育支援校への訪問と生徒との交流を行っている。今回も実施し、先生との交流もできた。９月訪問時は、支援先 NGO メンバーとのミーティングを３回持つ。サクー村に建設予定のコミュニティーセンターを借りれることを想定して、どのように運営していくかなど今後の課題も出し合う。 【その他②】日本での販路を広げるため、今回、大阪民族博物館内ショップにて、ダカ織ショールを置いてもらう（委託事業）。　その他地域のイベントでの販売活動をしている。
（２）実施成果： ①　サクー村の作業所は、前年度までは、ごく内輪で、技術を高め、より良い製品を作成するために励んできた。２０１５年の地震災害によるダメージは、この流れを遅らせた。 今年度は、貴基金の助けにより、思い切って、サクー村の一般の女性たちへの、われわれの活動をアピールし、関心を呼ぶ取り組みへと 1 歩前進させることができた。ネパール特有の村社会の中で、貧しく、無学な女性たちの自主的な参加が見えたのは、この活動を進める側にも、やりがいを呼び起こしてくれた。この成果は、現地 NGO の 5 月からの「無料のミシン・ダカ織教室」のポスターがきっかけとなった。現地のより貧しい農村女性たちが、気軽に参加出来るという結果を生み出し、技術を身に付けたいという女性が増えた。 ②　参加者の中で、低カースト（ダリット）の女性が 12 名中 7 名（4 ヶ月ミシンコース）を占め、読み書き出来ない女性の現実に接した。４ヶ月の訓練は、修了証を手にした彼らの継

続したいという声となり、次年度への取り組みを考えるきっかけになった。
③　講師による、ダカ織を利用したバッグの作り方、ブラウスの型紙から完成までの指導は、より完成した製品となり、そのいくつかは、地域でも、また、日本でも評価された。
④　現地 JICA 事務所へ出向き、活動のそのままを報告し、ダカ織、バッグ、ブラウスを見せ、アドバイスを受けたことは、当地 NGO 代表にとり、支えとなった。
⑤　新しい作業所は、以前よりも、村人の行き来する場に位置している。これは、通りがかりの村人の目にとまり、この活動への関心を呼ぶことになった。
⑥　２０１８年の１月にサクー村の１ヶ月祭りがあり、村のメインロードの一角に露店を出し、ミシン作品、ダカ織作品を販売する活動をするようになった。自分たちで販路を開拓する動きが見られた。（今までは、スタッフが中心であったが作業者の自主性が見えた。）
⑦　現地 NGO メンバーと、顔を合わせて、この活動の目標について、率直な意見交換の機会がとれた。

（３）得られた教訓など：
①　新しい作業所は、落ち着くまでに１転２転した。現地の慣習、人間関係が大きくかかわっていることが分かってきた。現場の事情を知り、話し合い、最後は現地の判断に委ねる必要性を、現地コーディネイターを通して分かった。
②　ネパールの１年は祭りなどの休みが多く、１年は約１０か月ぐらいの活動しかできない。活動計画を進める時に、「待つこと」を念頭に置くことを思い知らされた。
③　４ヶ月の作業所での訓練は生徒たちの絆を強くした。彼らの作品は製品として店に出すには届かなかったが、互いに作品を見せ合い、それぞれの自信につながった。
④　修了証は、彼らにとって、役に立つ１枚であり、次のクラスへの意欲を見せるかれらの思いを、真剣に受け止めていく必要性を感じた。（次年度も実践したい）
⑤　事務的なことで、領収書などの説明をメールを通して、試みたが（この方法しかなかったので）、いろいろと不備が生じ、現地訪問時に細かな説明をしておけばよかったと反省。
⑥　不祥事として、バイク事故にあった。左手の小指、中手骨を骨折し、大事に至らなく済んだが、ホテル、その他信頼置ける人に恵まれた。JICA 事務局にも感謝している。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：
① 今回の人材育成の取り組みは、現地の恵まれない村の女性を呼び覚ますきっかけに発展した。１２名の修了者の強い要望を受け、継続して、ミシンクラスを開放していきたい。
② ダカ織は、少し経験したことのある４名が参加希望した。初心者には、難しい感があり、来年度は、継続して、教室を開き、週２回ぐらいは、体験する機会を提供したい。
③　作業所が依然として狭い。現在２か所に分かれているが、１つにまとまれる場所を考えている。来年度、サクー村に建設中のコミュニティーセンターの一部を借りることも思考中である。　実現すれば、２０１８年度の取り組みがより進展すると思う。
④　作業所の中心になる人材は、現在、５人の作業者と２人の熟練者（２０１７年に決定）でなりたっている。ダカ織は、まだまだスキルアップをした訓練者が要る。一方、現地の慣習でもある結婚による退職がたびたびあり、せっかく育てた人材が去るという現実もある。既婚者で持続可能な人を発掘する必要が、引き続きいる。サポートしていきたい。
⑤　かれらの作品を地域で販売すると同時にカトマンズ方面で販売活動ができないかと思

考中である。彼らの積極的な販売への取り組みを、継続させるために、貴基金への再度の申請を試み、この活動の目標である、農村女性の自立への道を実現させていきたい。

⑥　サクー村の農村女性の自立支援活動は、少しづつ、サクー村の作業所からその周辺へと広がりつつある。今年度の成果を受け、来年度、より、多くの村人への働きかけをし、彼らの経済的自立として、どのような手立てがあるか（例えば、自分たちの手仕事は？）を試行錯誤し、地産地消のようなものを手始めできないかと考えている。これは、当地のNGOの積極的な行動に委ねられている。

⑦　販売活動については、ネット販売についても考えている。　しかし、ある程度の専門知識を持ってやっていかねばならない。　そのための手だてを学んで、可能性をさぐりたい。サクー村紹介を目的に、Sankhu.nepal.support.osaka で facebook を立ち上げている。まず、身近な人にサクー村を知ってもらい少しづつ、かれらの作品紹介へと進みたい。

３．その他(エピソード・感想・写真など)

（１）活動中のエピソード・感想など

①　４ヶ月のミシン教室中に作成した訓練生の作品は、外部には、出せなかったが、彼らのアイディアで、訓練生間で、修了式後、作品交換し、互いに安値で売り買いした。そして、祭りなどの晴れ着として、活用した者もいた。

②　新しい作業場は、１月の１ヶ月祭りでは、展示。販売の場として、活用できた。休日では、メインロードに沿って、露店をつくり、販売した。1日目に４枚のスカーフ、財布が売れた。積極的に村の中へ出、自分たちで売るという活動は今回初めてとなった。
（今まで、コーディネイターが出かけて、販売活動をしていた）

③　９月訪問時に合わせて、修了証授与式が行われた。ダリット出身者が７名も参加していて、読み書きできない女性もいた。大変熱心に取り組んだのが彼らだった。

④　11 月、TIFA の HP で情報を得て、サクー村のダカ織風景を見学したい旨の連絡あり、サクー村見学時に立ち寄り、ダカ織を 15, 6 枚購入して帰ったとか。

（２）活動の写真

（移動先の作業場）

（作業場正面）

（作業場の壁のポスター）

（ダカ織の講習）

（ミシン縫製の基礎を学ぶ）

（ミシン作業）

４ヶ月修了式

作業所で働く様子

作業場の壁に吊るしたダカ織

作業場で展示した作品

作品を展示（手前はエコバッグ）

日本から訪れた客（ダカ織購入）

ミシン講習から学び作成した小物

ロゴの入ったダカ織ショール（注文用）

サクー村の１月の祭りでの販売活動

サクー村祭りの露店：アピール文を貼り

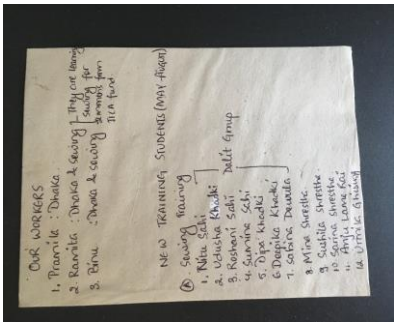
１月の祭りの準備風景

購入したダカ織機

購入したミシン

購入した物品

購入したコンピューター



ミシン・ダカ教室参加者名

２月３，４日の関西ワンワールドフェスタで JICA2017 年度活動報告。